

不登校児童生徒への対応研究部 研究報告（概要）

研究主題 市内小中学校の不登校ゼロを目指す
－校内組織でのセブncross法を活かした個別支援計画の作成－

概要説明

本研究部では、昨年度はマッピングを中心に不登校児童生徒の立場を理解し、なりたい自分を目指して支援の方法等を考える手立てについて研究を行った。引き続き、不登校の児童生徒に対する具体的な個別支援計画の作成及び不登校の現状の把握、実際の取組や実践から支援に役立つ情報を収集すること等を柱に研究を進める。今年度は、以下の二点について報告する。

- ①セブncross法に基づいた個別支援計画の作成、効果の検証
- ②不登校に関する市内の現状及び、不登校解消への事例

本研究の＜キーワード＞

- マッピング ○セブncross法 ○個別支援計画 ○よかったねカンファレンス
- カテゴリー化 ○2週間スパンの支援策 ○人間関係づくり ○共感的理解
- 共通理解 ○チーム体制

I 研究主題

セブncross法を活かした個別支援計画の作成

II 主題設定の理由

1 不登校の定義

文部科学省では、「不登校児童生徒」とは「何らかの心理的、情緒的、身体的あるいは社会的要因・背景により、登校しないあるいはしたくともできない状況にあるために年間30日以上欠席した者のうち、病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義している。

2 所沢市の不登校の現状

所沢市において、小学校では、男子はわずかではあるが増加している。女子は平成21年度に減少したが再び増加し、40名前後の状態が続いている。中学校では、男子が1～2割程度増加する傾向にある。女子は小学校と同様に平成21年度は減少したが再び増加し、150名前後の状態が続いている。つまり、小・中ともに男子は増加傾向があり、女子は横這いの状態が近年続いていることがわかる。

また、小学校6年生の不登校児童数の男子は約3倍、女子は約2倍が中学校1年生の不登校生徒数となっている。いわゆる「中1ギャップ」の問題は依然深刻な状態が続いている。中学校1年生で不登校となっている生徒は、小学校の時から不登校経験やその予兆があったことが考えられる。そのため学区内の小学校と中学校が連携して不登校問題に取り組むことはとても重要になっている。

小学校		H19 年度	H20 年度	H21 年度	H22 年度
児童 数	男子	37	37	37	40
	女子	44	40	22	42
	合計	81	77	59	82

中学校		H19 年度	H20 年度	H21 年度	H22 年度
生徒 数	男子	112	113	137	153
	女子	154	153	135	157
	合計	266	266	272	310

不登校のきっかけを見てみると、病気、家庭環境、友人との関係、学業…さまざまな要因が考えられている。また単純ではなく、それらが複雑に絡み合っていることも考えられる。

本人に係る要因	小学校	中学校
病気による欠席	9(8)	7(7.2)
その他本人の問題	43(31)	34.4(38.6)
合計	52(39)	41.4(45.8)

家庭に係る要因	小学校	中学校
家庭環境の変化	8(10.7)	2.7(3.5)
親子をめぐる問題	13.6(12.1)	5.5(6.7)
家庭内不和	4.5(4.9)	1.8(3.4)
合計	26.1(27.7)	10(13.6)

学校に係る要因	小学校	中学校
いじめ	0(1.2)	1.8(1.9)
友人との関係	6.8(7.9)	15.5(15.5)
教師との関係	2.2(2.0)	1.2(0.7)
学業の不振	0(4.1)	4.3(7.3)
クラブ・部活動不適應	0(0)	6(1.8)
学校のきまりをめぐる	0(0.9)	3(3.9)
入学・編入学不適應	2.2(2.2)	1(2.7)
合計	11.2(18.3)	32.8(33.8)

() は平成21年度

そこで、不登校傾向の児童生徒が抱える問題を探り、その児童生徒の感情・気持ちに寄り添い、どうしたら登校できるようになるか不登校防止策を考え個別支援計画を立てる。そのための一つの方法として、本研究において昨年度はマッピングを取り入れた。この方法は不登校傾向の児童生徒が、不登校に陥らないようにするための今までにない新しい方法である。このマッピングを通して原因や状況、心情等を把握し、支援の方法を挙げる。そして、本年度はセブncross法として、その支援方法をもとに個別支援計画を作成し実践すれば、その児童生徒に向き合い不登校防止の成果が上がることを期待できる。本年度は、『市内小中学校の不登校ゼロを目指す ～校内組織でのセブncrossを活かした個別支援計画の作成～』を本研究の主題として設定した。児童生徒を一人でも多く学校復帰に導きたい。

III 研究の内容及び方法

1 マッピングからセブクロス法を活かした個別支援計画の作成

児童生徒の不登校の要因はさまざまであり、より多様化の傾向が見られてきている。こうした社会背景の中、より児童生徒の心の内面に触れ、支援者自身が児童生徒自身の心の中を理解することが大切であると考えた。そこで本研究部では、昨年度、不登校児童生徒の心のモヤモヤや深層心理を雲に表し、図式化することで不登校の要因を探り、支援方法を考えていく、マッピングを活かした支援方法を中心に研究を進め、発表した。

さらに今年度は、マッピングからセブクロス法を活かした支援方法を研究し、実践してきた。活用する場として、今年度は、小学校中学年の児童を例にあげて支援方法を考えることとした。特に従来までのマッピングにさらにセブクロス法を加えた支援計画を立て、実行することで、よさや課題を明確にし、児童・生徒の変容を追っていくことができると考えたからである。

2 マッピングを生かした個別支援計画の作成の手順

- | |
|----------------------|
| (1) 事前準備 |
| (2) マッピング法による児童生徒の理解 |
| ①事例の黙読とチェック |
| ②不明な点の質疑応答 |
| ③模造紙に本人のイメージを雲の形で書く |
| (3) 支援方法の検討 |
| (4) 支援の留意事項 |

以下に、具体的方法を示す。

(1) 事前準備

- ① 事例 (A4 1枚程度)

【内容】ア 本人の年齢性別 イ 家族構成 ウ 欠席の状況 エ 本人の行動や様子

- ② 道具の準備 模造紙 ペン (3色) 付箋 (3色)

- ③ 研修参加者 担任、対象児童生徒のキーパーソン、教育相談主任

メンバーの人数は、3～4名程度、多い場合は複数グループにする。

(2) マッピング法による児童生徒の理解

- ① 事例を黙読。その際、以下の作業を行う。

ア 本人が困っていることや改善点、課題について 青色の線を引く

イ これまでの対応でやってきたことについて 赤色の線を引く

その際に、その対応が効果的だったものには○、効果的でなかったものに▲を書き入れる。

ウ 事例提供者に聞いてみたいことについて 緑色の線を引く

- ② 不明瞭な部分の質疑応答

事例提供者は参加者から質問をうける。(但し、事実確認のみとする。)

- ③ 本人の気持ちをイメージして模造紙に雲の形で書いていく。

ア **青マジック**で本人の現状、困った事を書いていく。

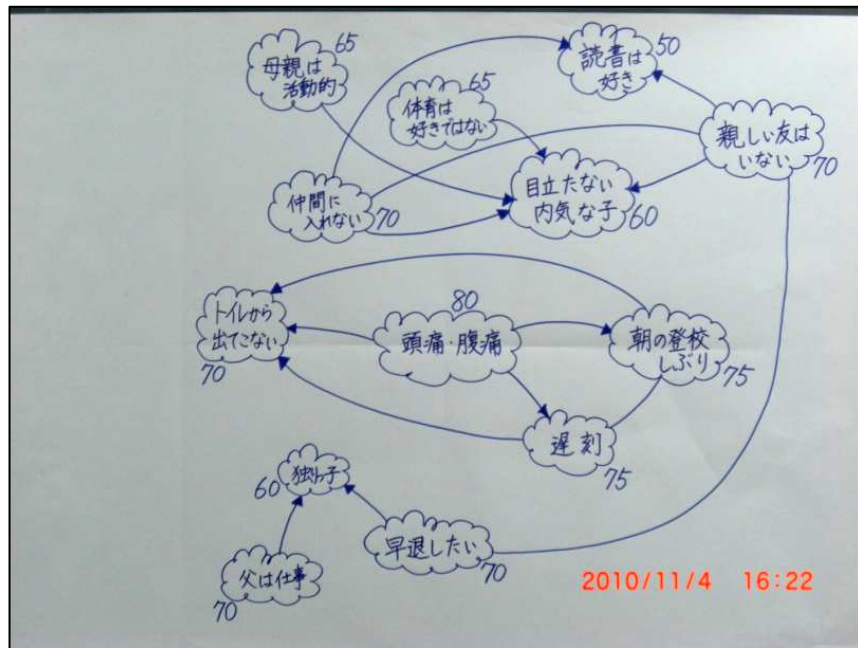
例えば、学校に来た時の様子、登校した時にどんな場面であつまずくか。



イ 本人にとって状態を点数化する。最高に高いところが100点とし最悪な状態まで書く。



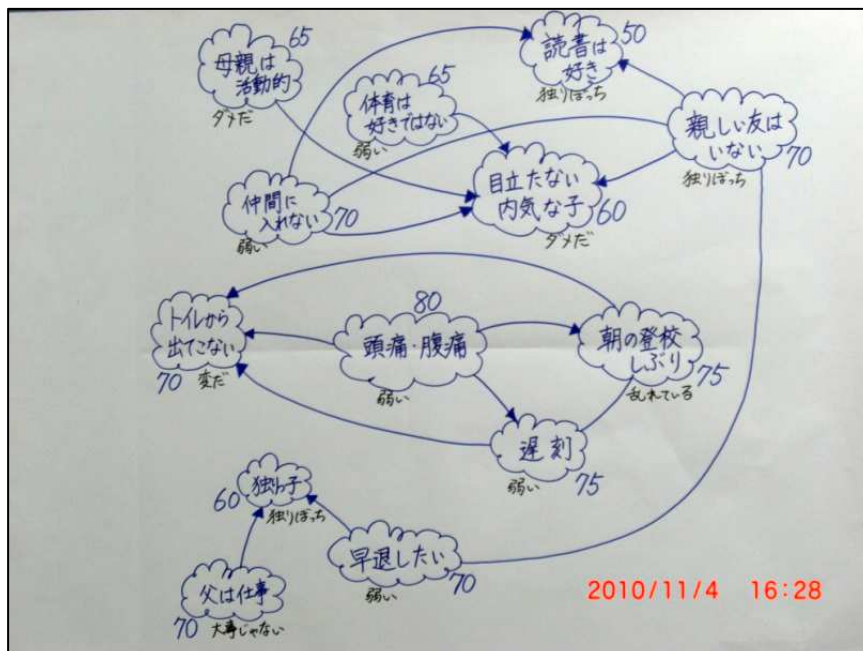
ウ 雲同士の所で関連している所を線で結ぶ。点数が高いところから低いところへ矢印を付ける。矢印がたくさん出ているところに注目し、矢印が出ている所に問題が多くアプローチの手がかりになる。



エ **黒マジック**で

端的に自分が自分をどうとらえているか客観的なイメージを書く。この際、感情は入れない。ぼくは、私はどんな状態なのかをイメージする。

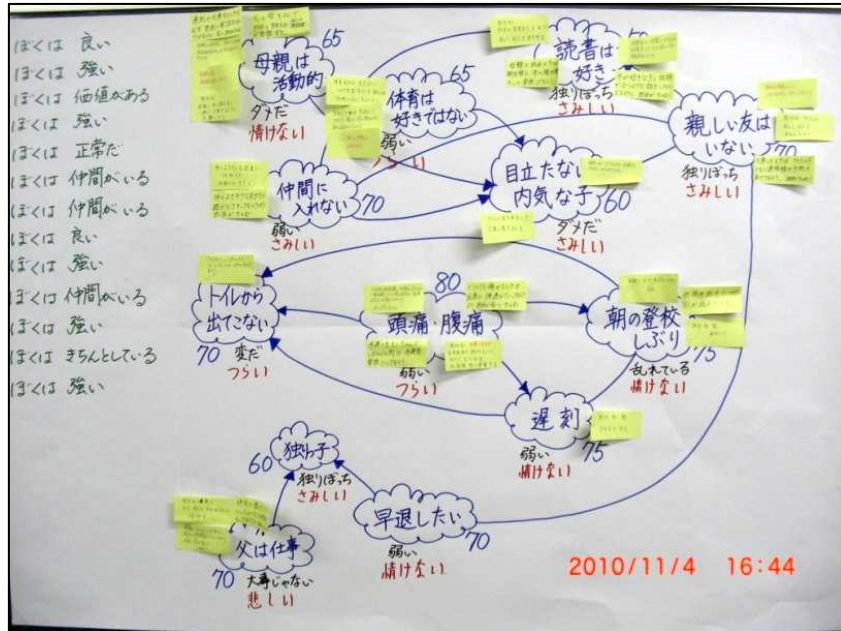
- 例) ・ぼくは普通だ ・ぼくは孤独だ ・ぼくは関心がない ・ぼくは息がつまりそう
 ・ぼくは乱れている ・ぼくは面倒くさい ・ぼくは不幸せ ・ぼくは苦だ
 ・ぼくはダメだ ・ぼくは悪い ・ぼくは価値がない ・ぼくは独りぼっち
 ・ぼくはだらしががない ・ぼくはつらい ・ぼくはばかだ ・ぼくはのろまだ
 ・ぼくは弱い ・ぼくは自分勝手だ ・ぼくは嫌われ者だ ・ぼくは体が弱い
 ・ぼくは大事にされていない ・ぼくは落ちこぼれだ ・ぼくは見捨てられている
 ・ぼくはみんなについていけない ・ぼくはいじめられっ子だ



(3) 支援方法の検討 付箋法

何ができるか支援の方法について具体的に考え付箋を貼っていく。

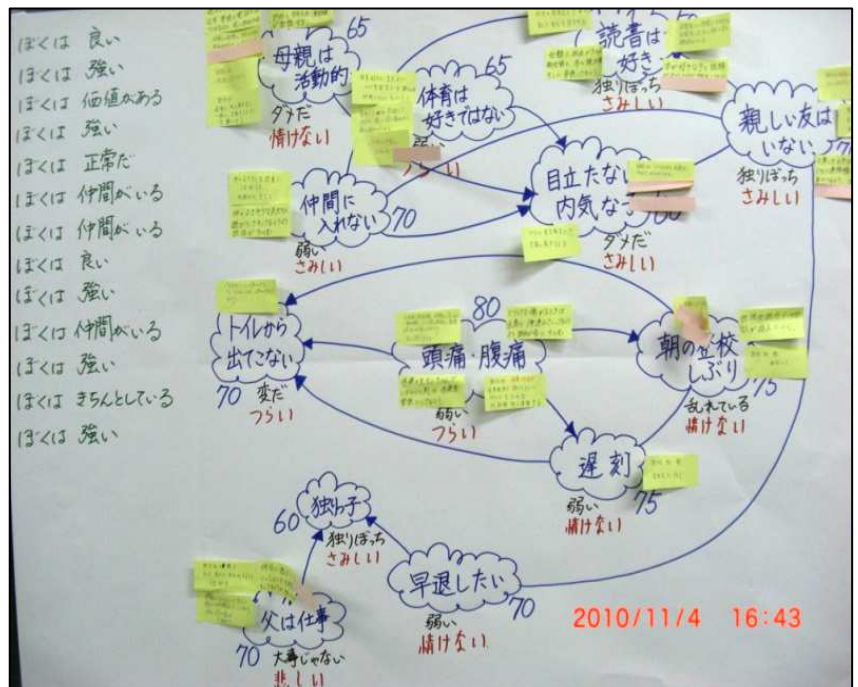
- <注> ア 本人になったつもりで、困った立場で考える。
 イ 当事者の教師になった立場で考える。
 ウ これからどうしていくかという視点で考える。



- ・～先生に～をしてもらう
 - ・母に～をしてもらう
 - ・相談員さんに～してもらう
- など、支援が担任に偏らず、多くの人が支援できるように考える。

- ① 3～4人で**黄色の付箋**を貼っていく。
(10枚を3分くらいで)
- ② その中で効果があると思われる自分の書いたもの以外の支援方法に**ピンク色の付箋**を貼って多くなった箇所に注目する。

*昨年度まではここまで研究し、実践し、発表してきた。



ここから、セブクロス法を活かした個別支援計画の作成の手順を説明する。

(4) セブクロス法による支援方法の検討

① 黄色の付箋を誰が支援するかによって分類していく。

大まかに分けて、7つ位のカテゴリーに分類する。

1. 本人に向けて
2. 家庭に向けて
3. 学級（友人）に向けて
4. 担任に向けて
5. 学年の先生に向けて
6. 指定の人（メインの人）
7. その他



② 各カテゴリーで、みんなで話し合っランキングをする。

- ・どの支援方法がよいかを話し合う。その際、上位に何を持ってくるかが重要。
- ・効果的だと思われる支援方法は上の方に付箋を移動し、それ以外は下の方に移動していく。（以下の写真の場合は79の支援策が出た。）
- ・最終的な支援方法の決定は担任が行う。



③ 2週間ほどのスパンで支援にあたり、効果のあった支援方法は継続し、その反対にあまり効果がなかったことについては、別の支援策を考える。

(5) よかったねカンファレンスによる支援方法の検討・振り返り

- ・よかった事例をまとめる。
- ・悪いことではなく、支援の中で何がよかったのか。
- ・どのような声かけが効果的であったか。
- ・かかわり方でよかったこと。
- ・だれがかかると効果的であったか。
- ・同じようなタイプの児童の支援のヒントになる。
- ・こういう子たちはこうしましょうね。ということが見えてくる。
- ・よかった指導は継続し、効果的でない指導は改善していく。

(6) 支援の留意事項

- ・関わりのある先生やチームで誰にやってほしいか。当事者のつらさを理解していく。
- ・支援が担任に偏らないようにする。
- ・つらい子は雲がたくさんある。
- ・雲は、入園、入学当時のことなど、状況をふくらませて書く。
- ・相談員などを交え、出来るだけ教員だけでは行わない方がよい。
- ・誰がどんな方法でどれ位の期間で支援をしていくか明確にする。
- ・うまくいかなかったことはやめ、効果のあるものは続ける。次の2週間くらいでアレンジし、変更していく。
- ・付箋はできるだけ多く記入し、より多くの支援策を考える。
- ・同じ事例で複数のグループに別れ、なるべく多く的人数で支援を考えるとより多くの支援策を練ることができる。
- ・マッピングをせずに、付箋から始めることも可能である。

5 研究の経過

- ・平成23年 5月24日(火) 第1回研究協議 【会場】所沢市立教育センター
委嘱状交付式・合同研修会
- ・平成23年 5月31日(火) 第2回研究協議 【会場】所沢市立教育センター
昨年度の研究についての発表
東京学芸大学 小林正幸教授と研究の方向性についての話し合い①
- ・平成23年 6月21日(火) 第3回研究協議 【会場】所沢市立生涯学習推進センター
東京学芸大学 小林正幸教授と研究の方向性についての話し合い②
セブncross法について学習する
- ・平成23年 6月30日(木) 第4回研究協議 【会場】所沢市立教育センター
合同研修会
- ・平成23年 8月4日(木) 第5回研究協議 【会場】所沢市立生涯学習推進センター
研究内容についての話し合い
- ・平成23年 8月22日(月)第1回実践研究 【会場】所沢市内小学校
セブncross法事例研修(小学校児童)
- ・平成23年 9月2日(金) 第6回研究協議 【会場】所沢市立教育センター
評価を通して学力を高める研修会
横浜国立大学教育人間科学部付属教育デザインセンター 高木 展郎先生
研究内容についての話し合い、アンケート調査についての吟味
- ・平成23年 9月13日(火) 第7回研究協議 【会場】所沢市立教育センター
研究内容についての話し合い、アンケート調査用紙の検討
- ・平成23年10月6日(木) 第2回実践研究 【会場】所沢市内中学校
事例研修(中学校生徒)
- ・平成23年10月上旬～中旬
市内中学校区において不登校の現状調査
- ・平成23年10月13日(木) 第3回実践研究 【会場】所沢市内小学校
セブncross法事例研修(小学校児童)
- ・平成23年10月18日(火) 第8回研究協議 【会場】所沢市立教育センター
アンケート集計
- ・平成23年10月27日(木) 第4回実践研究 【会場】所沢市内小学校
セブncross法事例研修(小学校児童)
- ・平成23年11月11日(金) 第9回研究協議 【会場】所沢市立教育センター
東京学芸大学 小林正幸教授と研究の方向性についての話し合い③
不登校の取組、セブncross法、よかったねカンファレンス等について学習する
アンケート集計、分析
- ・平成23年12月13日(火) 第10回研究協議 【会場】所沢市立教育センター
研究紀要原稿についての話し合い
- ・平成23年12月27日(火) 第11回研究協議 【会場】所沢市立教育センター
研究紀要原稿についての話し合い・まとめ

IV 事例研修

1 小学校セブクロス法研修会

- (1) 日程 平成23年 8月22日(月) 校内研修
(2) 参加者 校長、教務主任、養護教諭、担任、教諭14名

計18名

(3) 事例

中学年の女子。性格は、個人調査票によると負けず嫌いであった。感受性が強く、周りの色々な事象に敏感であるように感じられる。色々なことをきちんとやる几帳面な性格である。学力としては、教科全般的に高い学力を身につけている。

4月当初、クラスのある友人と口げんかした。その後、仲直りをしたと報告があった。そして、休み時間は数名の女子と教室にいることが多くなった。5月から欠席が多くなった。

欠席数は、前学校で1年生2日、2年生15日、
本校での欠席は以下のようになっている。

月	4	5	6	7
欠席数	0	5	12	5

母親としては、不登校傾向の原因が特定できず、様子見のようで、欠席を容認している。その後、母親が、教室まで連れてきたことがあったが、本児の表情は明らかに無理している様子であった。また、ある日、本児が遅れて教室に入ると、2人の友だちが近づき、遊びに誘ったが、本児は拒否し、一人でどこかへ行ってしまった。保健室ではやや自分勝手な行動が見られることもあった。

家族構成は、父、母、兄の4人家族である。

6月の演劇鑑賞会に参加を促すと、当日登校した。クラスの児童と離れた保護者席で鑑賞し、楽しんでいる様子であった。7月に入り、欠席は減少したが、遅刻が増えた。夏休み前の様子は、特定の友人とは仲良く過ごしている。また、以前より担任と会話をしたり、手伝いを一生懸命に行っていた。

担任として、なぜ学校に来なくなったのか推測ばかりしていた。今後は、もう少し会話を意識して持とうと考えている。

(4) 研修の様子

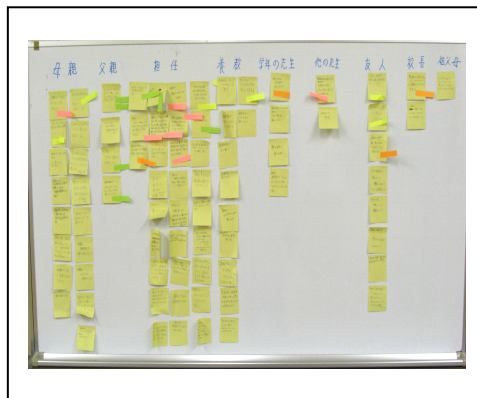
① マッピングの結果 (4グループ:太線の上下)

現状・困ったこと	点	客観的イメージ (私は～)	感情	なりたい自分 (私は～)
学校には無理して行っている	80	行こうとしているけど・・・	苦しい・つらい	学校には楽しく行きたい
周りの色々な事象に敏感	80	色々気になり困る	苦しい・困る	細かいことを気にしない
きっちりとしていないといや	80	きちんとしているけど・・・	いらいらする	他の人を気にしたくない
兄と比べられる	50	母に正しく理解されていない	ひどい・悲しい	母に構ってもらいたい
学校では我慢している	70	我慢	悲しい・つらい	楽しく伸び伸び過ごしたい
仲の良い子が少ない	40	それでもいいよ	大丈夫	もう少し友だちを増やしたい
良い子でないといけない	60	頑張っているのに	悲しい・みじめ	文句を言われたくない
嫌な子がいる。	60	我慢できない	つらい	気にしたくない
友だちとのけんか	70	どうしてだろう	嫌だ	うまく付き合いたい
以前にも登校しぶり	40	学校に行きにくい	つらい	学校に普通に行きたい
体調が悪くなる	80	困っている	不安	丈夫になりたい
大人のそばが安心	60	頼りたい	不安	自立したい
負けず嫌い	10	すごい。	嬉しい	だめ
感受性が強い	20	よく気が付く	かしこい	気にしない
教室がうるさいのが嫌	80	静かなのが好き	落ち着き	うるさいのが好き
保健室で勝手な行動	30	保健室は安心	ほっとできる	保健室には行きたくない
2年登校渋り	30	行きたくない	情けない	行きたい
学力高い	10	できる	素晴らしい	できなくてもよい
口げんか	80	間違っていない	正しい	間違っている
母が登校渋りを容認	60	わかっていない	悲しい	わかってほしい
問いかけ・微妙	20	よくわからない	悲しい	はっきりさせたい
几帳面	10	しっかりしている	すごい	だらしない
クラスに嫌な子	90	違う	悲しい	皆と同じ
教室にいることが多い	80	外で遊びたい	寂しい	中にいてもいい
学校に行きたくない	30	友だちに会いたくない	むなしい	会いたい
友だちと遊ぼう・拒否	70	許していない	くやしい	許したい
父・美大	20	私の自慢	誇らしい	リーダー
無理やり登校	80	友だちに会いたくない	むなしい	会いたい

現状・困ったこと	点	客観的イメージ (私は～)	感情	なりたい自分 (私は～)
5月から欠席が多い	70	悪くない	イライラする	自分の問題も認める
思い通りにならないと嫌	80	わがままで	イライラする	人のことを考える
授業に集中できない	80	静かにしてほしい	不満	充実した学習
兄との比較	85	兄嫌い	不満	兄を好きになる
男子がうるさい	80	迷惑だ	不満	仲良くしたい
母親とのかかわり	90	私を見て	不満・悲しい	認められている
特定の児童とのかかわり	90	仲良くしたくない	嫌	仲良くなりたい
我慢して登校	70	頑張っています	辛い・悲しい	無理しない・自然
母の期待・学校と家の差	90	疲れる	辛い	家は安心の場
保健室では開放感	10	私を見てくれる	安心・嬉しい	不安
負けず嫌い	90	私を見てほしい	寂しい	認められている
男の先生で話しづらい	50	私を見てほしい	悲しい・寂しい	わかってくれている
クラスに嫌な子	70	迷惑だ	不満	仲良くする
クラスにはいい子もいる	70	都合がよい	気が楽	さらによい付き合い
母の学校への不安・不満	80	不安です	心配	安心です
学校に行きたくない	70	弱い	辛い	強い
嫌いな子がいる	40	困っている	辛い	楽しい
母が兄と比べる	70	自分の方を見てほしい	悲しい・寂しい	独り占めしたい
父の影が見えない	70	孤独だ	寂しい	私を見てほしい
うるさい男子	70	困っている	嫌だ	満足だ
言葉遣いが大人っぽい	30	浮いている	寂しい	居心地がいい
兄病気	70	心配だ	不安	気楽だ
母に甘えられない	80	孤独だ	寂しい	幸せだ・安心だ
クラスが大人数	70	困っている	嫌	満足だ
いろいろなことに敏感	50	イライラする	苦しい	のんびりしたい
周りの目を気にする	60	良く見られたい	頑張らなくては	くつろぎたい
完璧主義	70	大人だ	すごい	気にしない
負けず嫌い	50	優秀だ	すごい	気にしない
体調不良	30	辛い	苦しい	元気だ
友達関係が気になる	60	疲れる	辛い	元気だ

③ 研修の実践から

- ・問題点として、マッピングから行ったが、一つの作業時間に制約があり、多様な考えを引き出せなかった。付箋からの作業も可能であるが、事例の内容を理解するためには、マッピングから始めた方が効果的であった。
- ・4グループで作業をし、経験年数や年齢構成も多様だったため、より多くの意見や支援策が出され、効果的であった。特に、支援策が79も出たことはセブクロス法で分類する際、多様な支援策が練られとても有効であった。
- ・支援の主が担任に偏らないようにしたが、結果的に担任が支援する付箋が多くなってしまった。



参加者の感想・意見

- ・子どもの内面を理解することができる。
- ・図式化することで、子どもの内面が分かりやすくなる。
- ・多くの先生の考えを知ることができた。
- ・言葉を書くのに時間がかかる。
- ・不登校以外の事例にも効果的なような気がする。
- ・図式化することで、視覚的にもわかりやすい。
- ・4グループで行うことにより、より多くの支援策が出た。
- ・グループの年齢構成、経験年数、子どもとの関わりのある先生を意図的にほぼ偏りなくグループ化したことにより、話し合いが円滑に進んだ。

(5) 経過

マッピングを終え、担任としては、以下の方策を選んだ。

- ① クラスでレクをする。
 - ・友達関係が円滑になった。
 - ・クラスで集団行動できるようになった。
- ② 担任が声かけを多くする。
 - ・意識的に言葉がけを多くした。
- ③ 担任、学年主任、養護教諭、かかわりのある先生などの関係者で話を聞く。

その結果、欠席数が9月は2日、10月は4日、11月は3日と改善の傾向が見られるようになった。

2 小学校セブクロス法研修会

(1) 日 程 平成23年10月13日(木)

(2) 参加者 校長、教頭、教務主任、養護教諭、担任、教育相談部員5名、
コーディネーター

計11名

(3) 事 例

家族構成

中学年の女子。父、母、姉(中学)と本人の4人家族。

学習面

勉強がとにかく嫌い。算数が特に苦手だが、不登校になる前は、最後まで一生懸命取り組んでいた。漢字は、家で取り組んでいる。好きな科目は図工と体育。授業では、自分の好まない教科は頑なに拒み、都合の悪いことになると白目をむく。気分も変わりやすい。宿題はしっかりと提出する。

生活面

運動や外遊びを好んでいる。とても神経質で、髪型や服装に気を遣い、決まるまで家を出ない。友達と遊ぶことは好きだが、親切にしてくれた友達に対して「気持ち悪い、やめて」と言ったり、つねったりすることがあり、自己中心的な態度を取ることがある。作業は自分のペースで行い、周囲のことは気にしない。「どうしよう」が口癖。

健康面

精神的な不安や落ち込みから、食欲がなくなることがある。外食に不安を感じているため、給食は止めている。

出欠状況(9月現在) 欠席:16日 遅刻:60日

(4) 研修の様子

① セブクロス法による分類

本人	母親	担任	養護教諭	友達	習い事	その他の先生
友達と関われるような支援を行う	困ったら教育センターに連絡	意図的に友達の関係を作る	居場所を確認する	遊びに誘う	連携を図る	積極的な声かけ
自信をつけさせる(ほめる)	社会的スキルを教える	社会的スキルを身につけさせる	社会的スキルを身につけさせる	一緒に勉強する		社会的スキルを身につけさせる
	外に目を向けられるようにする	選択肢を与える	選択肢を与える	関わりを増やす		選択肢を与える
	お母さんの友達を作る		食事の確認をする			
	選択肢を与える					
	役員を引き受ける					

② 研究の実践から

- ・マッピングからセブクロス法へ移行したが、支援策について個人で付箋を記入せず、グループで話し合っけて記入して貼っていった。そのため、付箋の量は少なくなってしまう。しかし、話し合いの密度が濃く、若手からベテランまで様々な経験の持ち主が語り合い、支援の方法を考えることができた。



参加者の感想・意見

- ・様々な立場の方で話し合い、支援の方法を考えるとともに、教員のスキルアップや自分の学級にも生かせる。
- ・教員だけではなく、外部の関係者などで話し合いができると、より多くの支援の方法が発見できたり、効果的な方法が見つかったりするかもしれない。
- ・担任に負担をかけることなく、支援策や支援計画を立てることができる。
- ・表にすることで、誰がどのようなことをするのか、誰がどのようなことをしているのか、進行状況はどのようなかがわかりやすい。所在をはっきりさせ、いつでも見ることができるような場所に保管したい。

(5) 経過

○本人

- ・社会的スキルを身につけさせる
→あいさつを中心に社会性の向上を図る。
→友達が自分に向けてくれることが当然と考えていたが、ありがたいという考えに思考が変わってきた。
- ・様子
→教室に午後から入ることは変わらないが、前向きな気持ちで、自分から入ることが多くなった。

○母親

- ・相談センター
→教育センターに来所し、密に相談したりすることで、どのようにしていけばよいのかという方向性が見えた。
- ・様子
→この状況をどうにかしなければならぬという焦りがあったが、次第に感じがやわらかくなり、落ち着いてじっくり取り組むことができるようになった。

3 市内小中学校の不登校のアンケート結果及び考察

項目		小学校	中学校	
児童・生徒に対する取組	面談の実施	5～7月・11、12月 2回/年	6月・11月 2回以上/年	
	面談者	親	親・子	
	欠席時の対応	連絡方法	電話	電話・家庭訪問
		何日目に	初日	初日
	アンケート	1回	2回（面談の前）	
	内容	生活・人間関係	いじめ・悩み・生活	
	エンカウンター	ほとんど実施	ほとんど実施	
生活ノート	約半数が実施 学年はまちまち	ほとんど実施 全学年		
校内組織	教育相談部会	月1	週1	
	生徒指導部会			
	報告	週1・月1	毎日・学期1	
	研修会	年1・月1	年1・学期1	
授業	交換授業	高学年での実施		
	T・T	実施	実施	
	少人数指導	中学年～高学年	教科によって実施	
小中連携	個別支援計画	ほとんど実施	約半数が実施	
	情報交換	年2回（夏・3月） 事例研修会・6年生の申し送り		
	出前授業	2月 6年生を対象 *年間を通して全学年で実施する学校もある		

集まった市内小・中学校のアンケート結果を見ると、どの学校でも組織的に不登校児童生徒へ対応を行っていることがわかる。

さまざまな形ではあるがアンケートをし、面談に臨んでいることがわかる。大きな違いでは、小学校は面談を親としているのに対し、中学校では三者面談のように親子で行っている。小中連携では、主に6年生が中学に入学する前の申し送りを実施している学校が多いが、それ以外に夏の研修や定期的に情報交換をしている学校があったり、年間を通して出前授業を行ったり、常に校区の先生が連携し地域の子どもを見ていく体制がとれている学校があったりした。

4 中学校区の小学校時欠席数（6年間で30日以上）からの中学校の欠席数の検証

A 中学校の例

	小学校で30日以上 の欠席者	中学校で長欠または欠席 が多く気になる生徒	中学校でほとんど欠席が 無くなった生徒
1年生	29	6	13
2年生	33	9	8
3年生	27	6	5

中学校で長欠、または欠席が多く気になる生徒の大半が、小学校でも欠席が多い。特に、小学校を低・中・高と分けた場合、中学年から高学年にかけての欠席が多い児童ほど中学校での欠席数が多くなっている傾向があった。小学校低学年での欠席は、体も小さく体調を崩しやすいための欠席もあり、学年が上がるごとに成長することで欠席も減り、大きな問題につながらないようである。

小学校で欠席が多かった児童でも、中学に入りほとんど欠席が無くなっている生徒もいる。この生徒の多くは、上記で述べた小学校の低学年での欠席数の多かった生徒である。また、中学年・高学年でも欠席が多くても中学校で欠席が0という生徒もいる。

中学3年生男子の例では、小学校で合計56日の欠席だった生徒が中学で1、2年生と欠席が0であった。その生徒は、とても温厚でまじめな性格であり、中学に入りバスケット部員として部活動で頑張っていて、学習もしっかりしている生徒である。彼の作文の中には「自分は今まで自信がなかったが、部活動を通して自信が持てるようになった。」と書かれていた。

このように、中学に入って部活動で頑張ることができたり、学習で自信がもてたりすることで、欠席が減少する傾向がみられる。中には学習は厳しい生徒もいるが、それ以外で自分の居場所があったり、認められたり、また、我慢ができる、トラブルが起こってもそれをコントロールして解消できるような力がついてくると欠席も減少しているようだ。

また、中学校1年生では、新たな気持ちで頑張ろうとしている生徒が多く、あまり欠席がないが、後半から2年生になって、部活動や友人関係、クラス替え等でトラブルがあったことをきっかけに、再び欠席が多くなる生徒もいる。このことから、生徒の状況をしっかりと把握しながら注意深く観察していく必要がある。

しかし、小学校での欠席数は少ないが、中学校で欠席が多くなる生徒をみると、小学校では元気いっぱい楽しく過ごしていたが、中学校で部活動に入ったものの、練習についていけず退部をしたり、友人関係でトラブルを起こしたり、学力の面でも厳しかったり等の理由で、退学傾向や非行傾向での欠席が多くなる場合も見受けられる。

V 研究のまとめと今後の課題

1 セブncross法による個別支援計画の作成の成果と課題

(1) 成果

① 役割分担の明確化

誰が何をどんな形で支援するかを、支援者別に整理することにより、チームとしてのより具体的な支援策が見つかる。また、意図的に担任以外の多くの教員や様々な人が具体的な支援を行うようにすることで、支援が担任に集中せず、チームとしての支援策につなげることができる。

② 短期間での支援計画

セブncross法によって、実際の支援の方法が整理されたら、担任がその中からできそうなことを選択することで、無理のない支援が行えるようになる。同時に、2週間という短期間で支援計画を立てることにより、実際によかった方策の継続か変更かを考え、より良い方策で支援していくことができる。

③ 多様な支援策と支援方法

なるべく多くの人数で支援策を考えることより、多様なパターンの支援策が現出し、支援の選択の幅を広めることができた。また、良かった支援策を集め、「よかったねカンファレンス」としてその支援方法をストックしておき、別の事例の場合にも応用できることがわかった。

(2) 課題

① 支援者の多様化

事例に対して、実践・研究した結果、支援者が、極端に担任と保護者に偏ることが多く、より多様な支援者の選択が望まれる。

② 支援計画に至るまでのプロセス

それぞれのチームで支援策を考えてたくさんの支援策を付箋に書き、投票してピンクの付箋を貼っても、最終の決定権が担任にあるために、折角チームで考えて最良とされた支援策が活用されないこともある。

2 次年度へ向けて

本研究にあたり所沢市内小中学校の教育相談担当者に不登校予防に関する調査にご協力いただいた結果、どの学校でも組織的に不登校児童生徒への対応を行っていることがわかった。本年度の研究が各学校でさらに浸透していくことで、より効果的に不登校予防が進められていくものと思われる。具体的には、今年度の研究の支援計画の作成にあたって、今後、市内の相談員の研修会や教育相談主任や特別支援コーディネーター、生徒指導主任の研修会などで広めていくこと、また、校内のケース会議や事例研修でも各学校が積極的に活用していくことが望ましい。さらに、所沢市として支援シートの統一化を図り、セブncross法を広く推進し、活用することによって所沢市の不登校ゼロを目指した取組に本研究が少しでも役に立てればよいと強く考える。

参考文献 「学校でしかできない 不登校支援と未然防止」

小林正幸監修 早川蕙子・大熊雅士・副島賢和編 東洋館出版社 (2009)